平成 30 年度第 1 回滋賀県協働プラットフォーム（前半）　議事要旨

１　日時

平成 30 年 6 月 14 日（木）　10 時 00 分から 11 時 00 分まで

２　場所

滋賀県庁北新館　５－Ｄ会議室

３　テーマ名

平成 29 年度協働提案制度による事業の成果・課題

・山門水源の森獣害対策防止事業について

４　参加者

（1）　NPO・関係団体等関係者

山門水源の森を次の世代に引く継ぐ会

(2)　テーマの提案者

滋賀県 県民生活部 県民活動生活課　県民活動・協働推進室

(3)　県関係各課

滋賀県 琵琶湖環境部　森林政策課

(4)　事務局

滋賀県県民生活部 県民活動生活課 県民活動・協働推進室

５　協議内容

(1)　事業実施者から成果・課題を説明

事業名は、山門水源の森障害防止対策事業で、小さい項目が四つあり、保全のための道路開設、獣害防止柵の設置、アカガシ林の整備、廃材を利用した丸太階段の設置、場所は滋賀県で一番北部、敦賀市と境である。

そもそもこの事業を、協働で滋賀県としたかった 1 番大きい理由は、プレゼンの時に話したように滋賀県の山林が荒廃している状況があるため。霊山とか、御池とか、赤坂山とかは、例外的に荒廃しているわけではない。外目には、緑に覆われているが、中に入れば実際には荒廃している。生物多様性が失われるのは当たり前で、災害に結びついている。そういう状況が悪化するのを防ぎたい。山門も食害が進んできており、何とかこれを防ぎたいと考えている。たくさんの鹿がいる。緊急を要する状況であり、県のいろいろな部署へ訴えている。何億もする砂防ダムを造る前に、鹿をなんとかした方が将来的にはいいですよという話をしている。

実際、山門はこういう状況です。林床は、ひどい所よりは、まだましな状況だが、少し鹿が入ると、食害にやられる。今これをネットで侵入を防止している。食害にあると、ほとんどの木が翌年には枯れてしまう。

白い杵がネットを張った場所、赤い杵がネットだけでは、イノシシを防げないので、トタン板も張っている。このように大規模なことをやって何とか防いでいるが、その面積は全体の森の中で微々たるもの。一方で、鹿の駆除もやっている。

湿原の中は、ネットと波板で覆って入れないようにしている。希少種、絶滅危惧種なんかもあるので保全をしている。一方、山頂部分はブナ林だが、下層植生は笹原だったが、もう皆目無い状況。それを何とか元に戻す作業をあちこちでしている。ネットを張ると、少し笹原が戻ってきている。獣害防止を行うと、それだけの効果が出てくる。

それから、2011 年に全部伐採した箇所では、半分の場所にネットを張り、残りはそのままとした。食害の影響がはっきりと出た。はっきりと差がでて、植物の種類も全然違っていた。

これは湿原の部分だが、ミツガシワという、ここでは非常に貴重な植物が、2010 年に壊滅し、ネットを張った結果、今年は、このような状態まで戻っている。1990 年代までの状況に戻すとなると、まだ２～３年はかかる。ですから、一旦やられると 10 年を超える時間をかけないと元に戻らない。

現在は資材を人力で運搬しているが、寄る年波のほか、膨大な量を運搬する必要があることから、作業道開設を昨年から行っている。先行伐採をして、機械で掘って、整地をしながら、先行伐採した木材を運搬車で移動して再利用する。昨年度は、200mの計画が 285m整備できた。今年度末にはここまできたい。これができると、事務所まで資材を運搬できる。実際はもっと上まで行きたいが、当面できない。

次に、もともと炭焼き林のため、15 年～20 年に 1 回は皆伐を部分的に繰り返してきたが、
現在でいうと 70 年ぐらい放置されている。アカガシは、日本列島の中ではここが北限。
木がどんどん大きくなると、下層植生に光が当たらず、下層植生が貧弱になり、何とか間伐とか除伐をやっていかんとあかんなと言っていた。そういうことを内部で考えているときに、実はアカガシというのは、大津祭の山車の材が、ほとんどこれで作られていて、それを保存会の人が聞き、県の方へ将来アカガシを利用できないかという申し入れがあったそうです。我々としては、下層植生を回復させるために、除伐をしたいという思いがあったので、それならば協働でと。昨年、除伐を始めた。と言っても、これまた命がけの仕事。斜面で、40～50㎝太さで高さ 20m近い木を倒すわけなので。育てる木約 30 本弱を残し、それ以外の 100 本以上を除伐する。保存会の方は、山車に使われているのは知っているが、実際どのように生えているのかを知らないので、まず見に来て、今年はそれぞれの木に銘板を付けた。昨年来られた方は、高齢者が大半で、実際に用材として使えるようになるのは最低 50 年ぐらいかかる。そのため、もう少し若い人に来てもらう必要があると言っておくと、今年は若い人も来てくれた。この秋には山車に乗る子供たちをつれてくる予定。除伐をやったが、脇芽がでてきており、保存会の方に芽かき作業をしてもらっている。このような作業をしないと、協働が続かないと思う。除伐した材は、運び出す方法がないので、昨年度は観察コースの整備に利用した。

獣害というのを防ぐことを、一般の人にわかってもらうため、ササユリを増やすこということを考えている。ある程度の年齢の方は、昔は、どこいってもあったという記憶があると思う。炭焼の山道の両サイドの草刈りを毎年やったから、光があたり、ササユリが咲いた。ところが、70 年放置しているので、僕が入ったころは 10 数株しかなかった。草刈を毎年やって、地元の小中学

生がササユリの種子を植えている。なんとか守らないといけないということをわかってもらいたい。たぶん、滋賀県内では、ササユリが一番多い場所だと思う。

150 万補助してもらったが、実際は 150 万でできる仕事ではない。もちろん、補助がなかったらできる仕事ではない。昨年は、事故もなく、作業はうまくいったと思っている。

(2)　対話・協議の内容

〇まず、成果と課題、後程今後どうしていくかを議論していきたい。地元として、成果、このあたりができたということについて、また今後何が障害になるかについて聞かせいただきたい。

〇会員は 130 名いるが、素人が多く、伐採のような作業が限られた人数でこなしている。作業可能なメンバーに仕事が集中しており、ボランティア団体がする仕事としては、度を超えていると思う。やらなくてはいけないが、森林組合に委託すれば協働事業にならない。

〇森林管理だけを森林組合に委託とかはできないのか。

〇かかる費用が全然違う。おそらく３倍以上、もっとかかる。森林組合の日当は、伐採では１人２万円以上かかると思う。30 年以上関わっているため、やらなくてはという意識があるが、ボランティア団体がやる仕事のかという疑問はある。しかし、やめてしまうと誰がするのか。県の財政ではできないのではないか。

〇森林組合とのコラボレーションは考えられるのか。

〇森林組合がボランティアで関わってくれるなら可能だが。協働事業でやるとなると、費用がもっとかかる。

〇この８月に専門家を呼んで勉強会する。ボランティアっていうのはどこまでやるのかと思う。他のことで県から 30 万円分担金をもらい、いろんな事から助成金をもらって、トータルで平均すると 500 万ぐらいつぎ込んでいる。そういうやり方をずっと 18 年間やってきて、だんだんやりたいことが増えくる。会員には、交通費しか渡せていない。好きだから続けているが、新しい会員には、メリット、例えば１日 5,000 円でもだせれば、ある程度来てくれるかもしれない。

我々は生物多様性保全できればいい、と思っているが、新しい会員を増やし、若返りをしないと続いて行かない。そのために、現実はどう財源を確保していくのかが課題。

〇協働というのは、県がやるより、民でやった方が、効率性がいいとか、あるいは県の手が届かない部分を民がやった方がいいというのをやっていく、という面が一つある。もう一つは、本来県がやるべきだが、その前に民がやっていき、やがては公共政策として、今後発展させていくための準備段階としての協働がある。

ボランティアとして皆さんがやってきたが、今後何を担ってきて、また、何を公共政策として、県として税金を投入して役割を果たしていくのか、役割分担を明確にしていく必要があると思う。財源、人材、範疇の問題がある。

〇山門を見ていて、2000 年代の初頭から食害が進んできた。ピークは、2011 年ぐらい。ネットを張り始めたが、他の県下の森林はどうなっているのかと思った。2015 年から山頂部を回ったら、今のような状況だった。山門で、僕らがする役割は、これだけすれば、こうはならないということを示すことだ。霊山のような状況になると、手の打ちようがない。一つの事例を示すための活動をしている。

○モデル的にやっているとなると、やがては県の施策として取り上げてもらうということを考えているのか？
○そう考えている。ネットを張るのは素人でもできるが、研究者の方から全山を囲まないと駄目と言われた。規模的に我々の範疇を超えている。今考える必要がある。大雨が降れば、下流への影響も出てくる。
○鹿が全県で７万頭ぐらい生息しており、年間１万９千頭ぐらいを捕獲目標としている。森林税を使って、国費、市町費を合わせて、鹿を１頭捕獲すると２万円くらいの補助金を出している。問題となるのは、ハンターが減少し、高齢化が進んでいる。滋賀県で訓練する場所がない。年間１万 5～6 千頭捕獲してもなかなか減ることはないのが現状である。
　農業サイドでは、ネットで農地を守れても、森林全体をネットで守るのは難しい。林業サイドとして、造林した所をネットで守るという補助金はある。山門のような自然林へネットの補助金を出す制度は現状ではない。ササユリを守るとなると、林業とは少し離れてしまう。もどかしいところではある。現状では、年間 30 万円の管理委託で担っていただいているところ。
○個別の事業でネットを張るのではなく、国土保全という意味合いもあるので、滋賀県全体で考えていく必要がある。県の幹部にも実際の現場を見て、考えてもらいたい。
○今後を考えると、３つの観点があると思う。一つは、県内に山門みたいなグループが幾つもある必要があるのではないかと思う。次に、何らかの受益者負担をもらうシステム、ある程度その県民または県外からお金をもらい、次の活動へ繋げる仕組をなんとかできないものか。ある県では、とある何でもない高原が観光地のようになって、人気が出ている。そのようなことで、森林税以外で、お金が入る仕組ができないかと。3 つ目として、林政だけの話ではないということ。
○どのようにお金を得ていくかを考えていて、現在でも有志の方から協力金をもらっている。それが年間で 50 万円程度ある。ササユリがずいぶん増えてきたので、イベントとかで、恒常的に協力金をもらっていかないと財源を確保できない。今後作業を続けていけば、モデル的なものになるはず。ネットでも見に行きたいとの反響もある。協力金の増も期待できる。何千万という助成金もあるが、実績報告の際、ほんとうに作業ができているかと考えると悩ましいところ。
　地道に作業を進めていくと、10 年もすれば自然に人がやってくるようになるのではないかと考えている。ただ会員の中には、今訪れる人を増やしたいという思いがある。
○山門水源の森についてのネーミングライツをやり、昨年応募していただき、年間 100 万円、昨年度は 3 か月分 25 万円分を出してもらた。30 年度までだが、引き続きお願いしていきたいと考えている。県が契約するが、山門水源の引継ぐ会へできるだけ、役立てるようにしたい。制約はあるが、契約企業と連携して支援ができたらと考えている。
○企業との連携を進めていただきたい。補助金制度について、行政の立場も分かるが、民の方から使いづらいところがある。より使いやすいものにしていくことが大事だと思う。
○山門のようなグループはあちこちであり、連携を持つのは重要と思うが、まとまることが好きな人、嫌いな人がいる。会議がたくさんあると、現場へ行けない。活動スタイル、考え方が団体間で違う。まとまるというのは大変。助言を求められたら、指導は行っている。
○同一化する必要なく、行政の方で団体の情報、補助金の情報を提供してもらえたらと思う。
○ホームページに、県域のボランティア団体を載せている。当初は県の方で事務局をもっていた

が、現在はボランティア団体で運営されている。しかし、団体の核となる人がいなくなると、活動が縮小している。リーダーとなる人がいるかどうかが大きい。
〇もはや、ボランティアをホームページで紹介するとか、行政的な組織を作って形式ばった会議をやっている場合ではない。そういう人たちが、公共政策の力となって、奮闘してもらわないといけない時代になっている。どうやって、県として関わっていくのかを考えていかないと、進まないと思う。

（終了）